

機関番号：13301  
 研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2007～2010  
 課題番号：19520206  
 研究課題名（和文） 米国社会と文学が歴史化する「男らしさ」：「戦争後」を生きる「奇形の男性像」研究  
 研究課題名（英文） Historicismization of Masculinity: Deformed Male Figures in Postbellum America  
 研究代表者  
 久保 拓也（KUBO TAKUYA）  
 金沢大学・学校教育系・准教授  
 研究者番号：80303246

## 研究成果の概要（和文）：

当研究は男性性研究の視点による文学研究を発展させるものである。アメリカの最大の試練であった南北戦争前後の歴史を扱う文学作品に注目し、戦争が生み出す「奇形の男性性」がその後体験することとなった試練を検証した。研究成果は国内及び、米国での研究発表を行い、注目をあつめることができた。成果はまた国内、および米国で発行される雑誌への論文として公開されている。

## 研究成果の概要（英文）：

This research seeks to develop a literary study from the viewpoint of masculinity studies. It casts a spotlight onto the literary works before and after the American Civil War to verify the “deformed” masculinities that the war produced. The research outcomes were read at two conferences in America, and one of them has also been included in an academic magazine, *The Mark Twain Annual*, published in America.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：英米文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：アメリカ文学、男性学、マーク・トウェイン研究、男性史、ジェンダー研究

## 1. 研究開始当初の背景

当研究代表者（久保拓也）は北海道大学大学院修士課程在学時より、一貫してMark Twainを中心とする19世紀アメリカ文学を取り上げ、社会的な批評法を援用した研究を進めてきた。大学院博士課程進学後は、ジェンダー学の一分野である「男性学」

がもつ文学研究への可能性に早くから注目し、理論化のための研究を進めてきた。代表者は近著（久保2004, 久保2001）などにおいて「男性性研究」からの批評方法が文学研究において多大な貢献を可能とする研究方法であることを証明し、アメリカ社会における男性化教育、及び男性性の系譜学

的考察へと研究の範囲を拡大している。

本交付研究へ至る道程としては、平成14-6年度科学研究補助金交付研究(若手研究B・課題番号14710327):「アメリカ社会とその文学におけるジェンダー教育とアイデンティティ研究」及び、平成17-8年度科学研究補助金交付研究(若手研究B・課題番号17720045):「アメリカ社会とその文学による、男らしさ製造の試みとその困難の系譜学的研究」が挙げられる。これらの研究により申請者は「男性学による文学研究方法」の基礎的な部分を構築することができた。特に2度目の科研費交付期間中に、第44回日本アメリカ文学会全国大会におけるシンポジウムに講師として招かれ、その研究成果を発表する機会を得た。当シンポジウムは高く評価されており、その成果は、やがて、代表者の米国での成果発表等に直接つながる意義深いものとなった。

このような学会における研究発表と、学術雑誌への研究論文発表により、当研究の成果が公にされていることはもちろん、申請者が推進している男性性研究およびその視点をういた社会・文学研究は、現代日本が抱える諸問題への対処法としても大きな注目を集めてきた。そのことは一般の市民を対象とする各種の講演やセミナーへも講師としての出席を求められることが多いことにも現れている。また代表者が居住する石川県の男女共同参画委員会へ委員として参加を求められることなどは、当交付研究が需要と注目の大変に高い研究であることを証明している。文学研究において、軽視される傾向にあった「男性というジェンダー」への視線に再び注目を集めるための基礎的理論を構築してきたことに加え、現代社会でやはり軽視されがちな、文学研究が持つ重要性を明らかにできたこともこの研究の大きな成果であった。さらに、現在までの研究が明らかにしたのは、「文学における男性性とアイデンティティ研究」の、歴史を遡る系譜学的研究の細分化の必要性である。本研究においては、過去に始まり

現在へとつながる「男性の苦難と喜び」の歴史を、特に「戦争」前後の激変する社会が生み出した文学作品に着目して考察し、その研究の成果を日米両国の現代社会における男性問題の未来の考察へも援用する。

## 2. 研究の目的

この研究は、米国社会とその産出する文学作品に対し「男性性研究」の視点を援用し、そこから現れる様々な「男性性の奇形」に注目し、「男とは何か」という普遍的な問題に取り組むことを目的とする。かつてイギリスの歴史家エドワード・ハリエット・カーは、「歴史」とは「過去の諸事件と、次第にあらわれてくる未来の諸目的との間の対話」と定義した。「男性性の歴史」も同じく、過去との対話が未来像を読み解く鍵になる。「男性性の歴史」が着目されるべき点はその歴史が同時に、適切な男性性を獲得し損ねた「男性性における奇形」たちとの対話でもあることにある。アメリカ文学に見られる「出来損ないの男性たち」の系譜は、当然のこととして、アメリカ建国時代にまでさかのぼる必要がある。だがこの研究は発生を、Michael Kimmelが *Manhood in America* (1996)で「自らの男性性について考察する機会」であると定義する「戦争」という契機に求め、なかんずく最も「アメリカ的」特徴をもつ「南北戦争」前後の1850年から1910年までの60年間を詳細に検討する。アメリカは戦争を繰り返し、医学はそれに並走して発展した歴史を持つ。最も「アメリカ的」な悲劇であった「南北戦争」は一説に65万人以上の「死せる男たち」を出したとされる。この戦争を「男性性研究」の観点から見た場合にさらに重要視されるべきは、死者の数よりも「戦争後を生きなければならなかった」重傷を持つ男たちの数であった。

顧みて、戦場医学技術発展の最重要母体となったこの戦争で生き残った男たちのうち、実に約7万人が、当時最先端の技術であった四肢の切断手術により命を救われ、

「欠損した身体」という苦悩を抱え、戦後の社会へ帰って行った。勇敢に戦った「男性性の証明」であるその傷跡と欠損は同時に、経済的な成功を持ってその証とした――「戦争に対する恐怖が支配する」戦後の社会――においては、「男性としての能力に欠けた」すなわち「男性性における隠せない奇形」の証明となってしまった。「男性性」の歴史はまさにその点において欠損したことを自覚して生きていかなければならなかった男たちの歴史でもある。「男性性」の歴史を巡る過去との対話は、その「奇形」たちの声を実証的資料や、文学に代表される文化的な資料の中から入念に、客観的に、取り上げ、適切な定義と再構築を与える作業を徹底する必要があると考えた。

### 3. 研究の方法

徹底的な資料収集とその精査から始め、その成果を出来るかぎり海外の学会で発表し、特に米国の研究者の注目を集め、この研究の進展にさらなる加速をすることを試みて4年間の研究を行った。

資料は主として、ジェンダー論、そのなかでも特に男性性研究、男性史、南北戦争地の医療に関わる各種文献、身体論、マーク・トウェイン研究に関連する各種文献などを中心に収集・精査をおこなった。それらから明らかになった事実や考察は、米国の学会に応募し、研究発表・論文投稿の機会を獲得し、発表するという手順をとった。

### 4. 研究成果

この研究は、平成 17-8 年度科学研究補助金交付研究（若手研究 B・課題番号 17720045）：「アメリカ社会とその文学による、男らしさ製造の試みとその困難の系譜学的研究」と密接な関係にある。これをさらに細分化し、「男性性の歴史化」を通して文学・文化研究の可能性を大きく発展させる研究となる。継続的研究であるという性格から、申請期間を通し、国内外の専門家向けの学会や学術雑誌によって、さらには学生、一般市民向けの講義などによる成果発表を研究の

進展と同時に行った。

平成 19 年度の研究活動は、「男性性研究」の最新成果に関する文献・資料の収集と精査、及びその調査結果の積極的発信が中心となった。これまでの二度にわたる補助金交付研究などにより、コンピュータなどの機材の更新が十分に進んでいたため、研究に必要なのは、書籍をはじめとする文献資料が主となった。この年度は主に国内において入手が可能な文献・資料の収集に集中することとし、主に身体論から見た、アメリカの男性性の歴史的研究に集中することが出来た。成果発表としては、東北英文学会より、シンポジウムの講師としての招待を受け、研究成果の一部をその場で発表し、その原稿は同学会が発行する *Proceedings* へと収められることとなった。この研究の重要な一部は、この年北海道大学名誉教授長尾輝彦先生が編著にあられ、北海道大学出版会から発行された書籍である、『文学研究とは何か：英米文学試論集』へ、「男とは何か：サミュエル・クレメンズと男らしさの病」という論文として、収録された。

平成 19 年度が、研究発表を行える体制がすでにある一方で、資料・考察の蓄積の年度であると位置づけられるのに対して、それに続く 3 年間は成果発表を中心とした。

平成 20 年度は、日本マーク・トウェイン協会が行う年次大会のワークショップ講師として推薦を受け、研究成果の一部を発表し、その原稿は一部ではあるが、同会が発行する『マーク・トウェイン：研究と批評』へと収録された。

平成 21 と 22 年度はその成果をさらに国際的に発信する重要な 2 年間となった。当初の予定通り、資料収集と国内学会を重視した最初の二年間を終わり、その米国で当研究の成果を問う機会を得ることが出来たのは重要であった。またそれにより、この研究が、日本を発信地とする注目に値する研究であることを明らかに出来たのは、意義深いことであったと考える。

特筆すべきものには、平成 21 年 8 月に米

国ニューヨーク州エルマイラにある The Elmira College Center for Mark Twain Studies に於いて開催された、Elmira 2009: The Sixth International Conference on the State of Mark Twain Studies にお躰る研究発表が挙げられる。申請者はここで、男性性と身体性の相関を、マーク・トウェインの作品における顕著な例により解明する研究発表を行った。この大会で発表された原稿は、高く評価され、米国のマーク・トウェイン研究者団体 (The Mark Twain Circle of America) が発行する学術雑誌 *The Mark Twain Annual* (2010) に収録され、刊行された。このことは、この議論の有効性を問うための貴重な機会になると共に、海外の研究者との議論を行うための、重要な土台となった。

最終年となる 22 年度には、米国ジョージア州アトランタで行われた South Atlantic Modern Language Association 年次大会での研究発表を行うことができた。この研究発表は、University of Georgia の Sharon McCoy 氏により募集されたパネル “Of its Own Accord and Uninvited’ : Mark Twain’ s Influence on Twentieth- and Twenty-First-Century Literature and Culture” に採用され、他 2 名の米国大学教授の発表と共に行われた。現在、この発表をもとにした論文を米国の学術雑誌に投稿することを目指し、鋭意執筆中である。

上記のように、この研究は「資料の収集とその徹底的な調査」、「学術的發展に向けての成果発表」そして、「学術的業績の実践的価値の発信」の三つを柱として行われた。4 年間の交付期間において、計 4 本の論文と、6 回の研究発表を行うことが出来た。論文の内、一本はアメリカの学会が発行する雑誌 (査読有) であり、また、研究発表も 2 度は、アメリカでの発表 (査読有) であったことが、今回の交付期間の研究成果発表として特筆されることと考える。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

① KUBO, Takuya, “Turn Us into Real Men: Mark Twain and His Incomplete Masculine Education.” *The Mark Twain Annual*, Vol. 8 (2010), 86-96. 査読有.

② 久保拓也 (他 5 名) 『『ハドリーバーグを墮落させた男』を読む』(日本マーク・トウェイン協会第 12 回大会ワークショップ報告論文), 『マーク・トウェイン: 研究と批評第 8 号(2009), 76-85, 査読無.

③ 久保拓也 「大衆を／が見る : 19 世紀大衆文化とマーク・トウェイン」東北英文学会 (日本英文学会東北支部) 第 62 回大会プロシーディングス(2008)、152-159. 査読無.

[学会発表] (計 6 件)

① 久保拓也, 「マーク・トウェインと戦争 : 男らしさと身体の問題を巡って」, 日本アメリカ文学会中部支部 2011 年 2 月例会, 2011 年 2 月 19 日, 愛知淑徳大学(愛知県)

② KUBO, Takuya, “Mark Twain’ s Search into the United ‘Extraordinary’ States of America,” 2010 South Atlantic Modern Language Association Convention, 2010 年 11 月 5 日, Loews Hotel Atlanta (米国ジョージア州アトランタ)

③ 久保拓也, 「アメリカが表象する『奇形』の国家身体とジェンダー」(英米文学部門シンポジウム「似姿への欲望—ロボットから読む英米文学テクスト」司会 : 新関芳生・関西学院大学教授), 日本英文学会中部支部第 62 回大会シンポジウム, 2010 年 10 月 17 日, 金沢大学(石川県).

④ KUBO Takuya, “Turn Us into Real Men: Mark Twain and His Incomplete Masculine Education” *The Sixth International*

Conference on the State of Mark Twain Studies. 2009年8月8日, Elmira College (米国ニューヨーク州エルマイラ)

⑤ 久保拓也 (他 5 名) 『『ハドリーバーグを墮落させた男』を読む』, 日本マーク・トウェイン協会第 12 回大会ワークショップ, 2008 年 10 月 10 日, 西南学院大学(福岡県).

⑥ 久保拓也 「大衆を／が見る：19 世紀大衆文化とマーク・トウェイン」東北英文学会(日本英文学会東北支部) 第 62 回大会, 2007 年 11 月 17 日, 山形大学 (山形県) .

[図書] (計 1 件)

① 長尾輝彦編著『文学研究は何のため：英米文学試論集』所収、久保拓也「男を作るものは何か—サミュエル・クレメンズと男らしさの病」北海道大学出版, 2008 年, 223-237.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

久保 拓也 (KUBO TAKUYA)  
金沢大学・学校教育系・准教授  
研究者番号： 80303246